

# 池田大作における「若き日の読書」の予備的研究

——「読書ノート」と創価大学池田文庫とをめぐって（1）

伊藤 貴雄・岩木 勇作・川口 雄一

## ▼解題

本稿は、創価大学創立者・池田大作（1928～ ）の著書『完本 若き日の読書』（第三文明社、2023年）に「特別収録」として配された「読書ノート」の抜書の出典調査に関する報告である。この「読書ノート」は、もともと『第三文明』第3号～第8号（第三文明社、1964年3月～8月）にかけて連載された作品のことである。『雑記帳』という私的なノートから抜粋されたもので、副題には「入信前後（昭和21年～22年頃）の雑記帳から」と掲げられていた。すなわち、この「読書ノート」は、池田の「若き日の読書」の軌跡の手がかりを示す重要な資料である。なお、この資料は『池田大作全集』全150巻（聖教新聞社、1988～2015年）に収録されていない。

若き池田の読書といえば、彼自身の著作『若き日の読書』全2巻（第三文明社、正＝1978年、続＝1993年）がよく知られている。これらは、同じく『第三文明』の連載（正＝1977年1～12月、続＝1992年1～12月）を初出にもつエッセイ集である。青年時代に読んだ古典的名著が取り上げられ、当時の読後感や戸田城聖（1900～1958）のコメント等が紹介されている。いうまでもなく、連載時の諸状況に対する鋭い緊張感も織り交ぜられた作品である。

この「読書ノート」と『若き日の読書』（正統）とで取り上げられた古典的名著は、必ずしもすべて重なり合うものではない。両著とも、「若き日」を過ぎて発表された池田の作品と比べてよければ、後者の方には回顧的性格がより強く、前者の方が「若き日」の記憶をより鮮明に残している。要するに「読書ノート」は、「若き日」により近い時点で池田が公表した資料であり、若き池田の思想形成の内容とその意義を明らかにするうえで、極めて重要な手がかりなのである。

この「読書ノート」の解析には一定の手続きが求められる。そのほとんどの部分が古典的名著の抜書で成り立っているからである。これらの抜書の選定と配列との意味の解明が求められる。この解明によってつぎのような問いを解くことが可能になるであろう。——「若き日」のノートを公表した池田は、1964年当時、どのような意図を抱いていたのか。また、これらの書目を通じて池田は、どのような思想形成を歩んだのか。こうした「若き日」の読書を背景にもった池田

---

Takao Ito（創価大学文学部教授）

Yusaku Iwaki（創価大学学士課程教育機構非常勤講師）

Yuichi Kawaguchi（創価大学法学部非常勤講師）

と戸田との出会いは、池田自身の内部においてどのような思想ないし信仰を可能にしたか。

その一方で、「読書ノート」における抜書の1つ1つがどこから由来するものなのか——池田はどの書誌を通じてこれらの言葉に出合ったのか——という事実がまだ十分に明らかにされていない。それにもかかわらず、この事実認識から始めなければ、上の諸問題に答えることができない。少なくとも、池田の思想形成を追経験し、内在的に理解してゆくような研究は、このような認識を避けては不可能であろう。本稿は、こうした観点に立って調査を進め、まとめたものである。

以上の問題関心にもとづいて本稿は、「読書ノート」に掲載された出典の情報を調査し、明らかにしたものである。ただし、十分に明らかにし得た出典は、当該調査の結果の一部にとどまる。本稿では当該調査の過程で確認できた現時点での認識や情報を、仮説や推定にとどまるものも含めて明らかにするものである。いうまでもなく望まれるのは、仮説や推定ではなく、確実性の高い情報の全面的な公開であろう。そのためには、なお多くの時間と資料とを要する。そこで、本稿は、そうした展望を将来に見据え、池田研究を核とした近現代思想史研究の第一歩としてまとめたものである。

以下では、本篇に関わることとして、(1)「読書ノート」の出典調査に着手した経緯、(2)本稿の学術上の意義、(3)本稿の編集上の注意(凡例)について述べ、本稿の特性と学術上の意義とを示す。なお、本稿(本篇)の作成にあたっては、多くの協力者による助力を得ることができた。主に創価大学の学部生(村木香一、小谷伸弘、中川和也、福田義輝)並びに卒業生の有志による助力である。ここに記して深く感謝申し上げる。ただし本稿の記載に関する責任は原則として編者が負っている。

## 1. 「読書ノート」の出典調査に着手した経緯

まず、「読書ノート」の出典調査に着手した経緯を記しておきたい。本稿の内容はこの経緯に大きく方向づけられているからである。そしてこの経緯は、本来別個の事柄でありながら相互に関連する2つの事情から成っている。(1)演習「創立者の若き日の読書に学ぶ～「池田文庫」開設25周年記念～」の開講と(2)『完本 若き日の読書』(前掲)の刊行計画という2つの事情である。

### (1) 演習「創立者の若き日の読書に学ぶ～「池田文庫」開設25周年記念～」の開講

2022年度秋学期に創価大学(以下、本学と表記)の共通基礎演習の1つとして「創立者の若き日の読書に学ぶ～「池田文庫」開設25周年記念～」が開講された。当該演習は、本稿の編者3名のほか、勘坂純市教授(池田大作記念創価教育研究所所長)、牛田伸一教授(同所員)、アンドリュー・ゲバート教授(同所員)と共同で実施した、いわゆるオムニバス授業である。「読書ノート」または『若き日の読書』で池田が取り上げた古典的名著を、各教員が主題とし、読書における池田の思想的態度の析出を試みた。いわば実験的な授業である。なお、教員の試論的な講義を

前半に位置づけたうえで、後半では各学生による同様のプレゼンテーションとディスカッションとを実施した。

ところで、当該演習のもう1つの目的は、池田研究の資料として本学図書館所蔵の池田文庫の意義を確認し再評価することにあつた。池田文庫は、創立者が本学学生の学問・研究のために寄贈した約7万冊の図書のことである<sup>1</sup>。この書籍群のなかには、まさに「若き日」の池田の手沢本（線引き・書き込み等のある書籍）が含まれている。これらの手沢本は、池田研究における第一級の資料にはかならない。当該演習では、こうした諸資料の調査や活用も期待されていた<sup>2</sup>。

このような趣旨を共有した当該演習のなかでは、教員と学生とが手を携えた共同研究として授業を進めることができた。教員が資料調査や解析等の手ほどきを行ったことはもちろんとして、教員の手の及ばない資料調査の結果や、各々の問題関心と意義とをもつ主題について学生から積極的な報告があり、活発な議論が行われた。これらの一部は本稿の作業に直結している。なお、本稿の作業にあたり助力を惜しまなかった学生たちは、すべて当該演習の受講者である。本稿の内容が当該演習の開講・実施に方向づけられていると述べたのは、こうした事情によるのである。

## (2)『完本 若き日の読書』の刊行計画

上の演習の開講と並行して、第三文明社では『完本 若き日の読書』の刊行計画が立ち上がった。既刊の『若き日の読書』（正統）に、「特別収録」として「読書ノート」（付・未発表原稿）を新たに加えて刊行する計画である。そして、このように「読書ノート」を収録するにあたり、抜書の個々について出典（引用文献）を明記し、読者の便宜に供する方針を編集部が決定した。ここから本稿編者は、出典調査の協力要請を受け、作業に取りかかった。折しも、前記の演習を実施しているなかのことであり、調査対象も膨大であることから、受講者と一部の卒業生とに声をかけたところ、有志の助力を得ることができた。

『完本 若き日の読書』所収の「読書ノート」の出典調査にあたって、第一に優先されたのは、池田自身が書き残した所感と出典をもつ抜書とを識別する作業であつた。「読書ノート」の文章すべてに出典が明記されていたわけではなかったからである。第二に、抜書と認められた個々の文章について、出典を明らかにしてゆく作業が進められた。この場合にも、精細な書誌情報にかまわず、まずは該当の文章を掲載した書誌の存否の確認を進めた。

<sup>1</sup> 本学図書館のホームページには、寄贈の経緯についてつぎのように記録されている。

「中央図書館 A 書庫 7 層には、創立者が若き日から収集された蔵書約 7 万冊「池田文庫」として設置しています。池田文庫は、『学生の皆さんが、大いに読み、活用して実力を磨き、成長してくれるならば、こんな嬉しいことはない』、とのご伝言を添えて、創価大学図書館にご寄贈頂き、1997 年 5 月 8 日に開設されました。蔵書は、哲学、歴史、社会科学、自然科学、芸術、文学など、幅広く、学術的にも優れた図書が多くあります。図書館では、池田文庫を、創価大学の永久財産として、継承していきます。」

なお、当該演習中、池田文庫所蔵資料の調査にあたっては、図書館職員より多大な助力を得ることができた。この場を借りて深く感謝申し上げます。

<sup>2</sup> 当該授業の内容については、『創価新報』（創価新報刊行会）が 2023 年 1 月から開始した「読書は人生を開く扉——創価大学「池田文庫」をひもとく」の連載記事を参照。

第三に、残る作業として、池田が直接手にした書誌の特定が求められる。たとえば、国木田独歩『欺かざるの記』という書籍にも多数の版があり、望まれるのは池田が直接手にした版を特定することである。また、たとえば「一人立てる時に、強きものは真正の勇者なり」というシルレル（F・シラー）の言葉は、過去に多数の人々に引用、紹介されており、池田が原典から直接引用したのか、それとも研究書等で引用されているものから再引用（いわゆる孫引き）したのかといった問題が残る。仮に該当の邦訳がなかったとすると、ドイツ語版からみずから訳文を作成したのか、英訳版からの重訳か、また直訳か意識か、といった問題が新たに生じる。池田研究のためには事実認識から始めなければならないと前に述べたのは、こうした諸事実が池田の思想的意義に大きく関わるからである。

これらについて編者は、第一・第二の作業はおおむね順調に進めることができたが、第三の作業に関しては多くを推定にとどめざるを得なかった。その理由の1つは、作業日程が『完本 若き日の読書』の刊行計画により限られていたこと、もう1つは、書誌の確定の裏づけとするべき資料がまだ十分揃っていないことに求められる。

このような事情から、『完本 若き日の読書』所収の「読書ノート」では、詳しい書誌情報の掲載を留保し、池田が手にした文献に関してほぼ確実といえる情報までを記載するにとどめた。なお、読者の便宜に供するという『完本 若き日の読書』の編集方針にもとづき、推定にとどまる書誌でも確実性の高いものは極力注記した。おそらく、この情報だけでも読者は、池田が実際に接した個々の文献を手に取り、彼の思想形成を追経験する手がかりを得ることができるであろう。

本稿の内容は、当該調査の延長上に位置づけられる。すなわち、時間的制約により調査が及ばなかった点について、更に時間をかけて調査を進めた。また、本稿では、『完本 若き日の読書』に記載しなかった推定上の書誌も、あえて掲載することとした。いわば池田研究の予備的報告としてこれを位置づけ、今後の課題を明らかにしてゆくものである。

なお、以上の出典調査は、「国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/>)の実績に多くを負っている。

## 2. 本稿の学術上の意義

本稿が進めた調査・研究は、前記の通り予備的なものにとどまっている。が、この作業の先に大きな成果が得られることもまた確実である。したがって、期待される成果についてあらかじめ見通しを示し、本稿の学術的意義を確認しておきたい。いうまでもなく、将来の展望という点には、今後の課題が含意されている。

(a) 池田大作記念創価教育研究所では、2021年度より10年間にわたる研究事業のグランドデザインを提示している。このなかで、本学の建学の理念に深く関わっている牧口常三郎(1871～1944)・戸田城聖・池田大作の思想の研究を重要な事業の1つとして位置づけている。本稿は、この研究事業における池田研究の1つに数えることができる。

この池田研究に関しては、これまで国内を中心とする基礎的資料の収集・調査（これには本学草創期の関係者へのインタビューも含まれている）や、英語圏・中国語圏をはじめとする海外の研究者との学術交流に力を入れてきたが、本稿はこのうち前者の基礎的資料の調査の1つに位置づけられる。

なお、「若き日」の池田の読書には、師・戸田との思想的交流という側面も含まれる。このことから、本稿は戸田研究（延いては牧口研究）に通じる意義をもそなえている。

(b) 池田研究は、すでに幾つかの研究書もみられるが、基礎的資料という点では、まだ十分把握できていない<sup>3</sup>。基礎的資料というのは、研究対象者自身の著作や自筆資料、および引用文献のほかに、個人蔵書も含まれる。個人蔵書とはこの場合、何より本学図書館に所蔵されている池田文庫のことを指す。当該文庫には池田の手沢本だけでなく、本学の建学の理念に賛同した支援者から、池田を通して寄贈された書籍も含まれている。それゆえ当該文庫については、手沢本を判別するための調査が将来的には求められる。この研究事業を今後の課題として残しつつ、本稿は、こうした基礎的資料の調査と把握という実証的方法による究明を最優先とした。

(c) なお、池田研究は、たんなる本学の大学史および創立者の研究にとどまらないことを確認しておきたい。近現代の日本または各国の思想史のなかで、池田がその歴史の一角を形成した思想家として認識される機会には、まだ十分恵まれているとはいえない（僅少なから海外の諸大学の共同研究等に事例が認められる）。池田自身は、たしかに創価学会および創価学会インタナショナルの宗教運動を大きく発展させ導いた宗教者にちがいないが、彼が発信しつづけたメッセージは狭義の宗教運動の枠に収まるものではなく、教育や文化など広義の社会活動を世界的規模で喚起した人物にほかならない。しかもそのような彼の思想や言説は、けっして自家撞着的なものではない。

池田の思想の普遍的性格はまた、思想形成の過程とこれによって醸成された彼の教養とのなかに理由がある。本稿がとりあげる「読書ノート」は、そうした池田の思想の可能性に迫る資料的価値をもつ。したがって、本稿の学術的意義は、あくまでもその資料的価値に支えられたものである。前に述べたような今後の研究への足がかりとされることに、本稿のさしあたりの意義が認められるであろう。

<sup>3</sup> 先行研究として、蕪沢賢一「創立者にみる、若き日々の読書——創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟」（『創価教育研究』第2号、創価大学創価教育研究センター、2003年、287～356頁）がある。当該論文では、「読書ノート」『若き日の読書』『続・若き日の読書』に挙げられた文献と池田文庫所蔵本とを関連づけ、リスト化している。

### 3. 凡例

一、池田による抜書は、すべて  で囲んだ。原則として抜書の表記は、『完本 若き日の読書』所収の「特別収録 読書ノート」に準拠している（同書 508 頁の「凡例」を参照）。

なお、この「読書ノート」における各々の抜書は、池田により○記号もしくは1行アキを用いて仕切られている。これらの仕切りは、前後で出典が変わる際の標識とされている場合もあるが、同一の出典の抜書の間で用いられている場合もある。本稿では、これらの差異を考慮の外に置き、この仕切りに応じて  囲みで区別した。その際、抜書ごとに通番を付けて（抜書番号）、出典情報を記載した。この点に関する「読書ノート」の原形については、適宜『完本 若き日の読書』を参照していただきたい。

二、「出典」欄では、当該調査で特定できた情報を記載した。したがって多くは『完本 若き日の読書』の記載と合致した内容である。ただし、その後の調査によって新たに明らかになった情報は適宜差し替えた（この場合には「備考」欄にその旨を記した）。

三、「出典ノート」欄では、出典を詳しく特定できなかった場合や推定にとどまった場合に、その理由・根拠等を記載した。版が複数存在し、そのなかでの特定が困難という場合には、「若き日」の池田が手に取ることができた書誌の情報を極力網羅的に記載した。

四、「池田文庫所蔵資料」欄では、「出典」ないし「出典ノート」の欄で取り上げた文献の所蔵情報を記載した。前記の通り、この所蔵情報は「若き日」の池田が直接手にした文献を含んでいる可能性がある。この点に関する調査は今後の課題としているが、この調査に先駆けたノートとして所蔵情報の一覧を記載した。

この場合、複本が所蔵されていることを考慮し、ラベル番号（登録番号）ごとに記載した。これを手がかりとして、今後、手沢本の識別・調査を進めることが可能である。本篇では、一般的な書誌情報につづけて、「ラベル」と表記し、9桁の番号を記載した。

なお、池田の「若き日」（青年期）について本稿では、このたびの出典調査の結果に鑑み、1954年（昭和29年＝池田26歳）まで含めることとした。

五、「池田研究ノート」欄では、抜書の文言について、池田が他の機会に記載・発言した文献とその該当箇所を記載した。これらの記載・発言を突き合わせることにより、抜書の文言や原著者の思想等に対する池田の解釈やイメージを体系的に把握することが期待される。なお、本稿では調査対象を『池田大作全集』（前掲）に限定し、該当の巻数とページ番号、およびその作品名（出版年）を記載した。なお、当該調査の対象は主要な作品にとどまり、網羅的な把握は今後の課題とした。

（記載例）『希望対話』（2003年）＝『全集 65』386頁

\* 池田の抜書とほぼ同じ文章が『希望対話』（2003年）で用いられていること、そのことを『池田大作全集』第65巻の386頁で確認可能であることを示す。

六、「備考」欄では、上の調査結果に関する付帯的情報を記載した。

▼読書ノート（一）：入信前後（昭和21年～22年頃）の雑記帳から

\* 『第三文明』第37号（1964（昭和39）年3月）

(1)

一書の人を恐れよ。

●出典

ラテン語の格言

●出典ノート

抜書の元となった文献は不明（多数の書誌のある文献）。

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

・『希望対話』（2003年）＝『全集65』386、387頁

●備考

当該抜書は、歴史上、多くの人々が様々な機会に紹介してきた有名な格言である。ラテン語の諺、ローマ人の諺として紹介されることが多い。一例として下記の文献を参照。

- ・「ラテンの諺に曰く唯一書の人恐るべしと」（山路愛山『聖書論』『愛山文集』内山省三編、民友社、1917年、38頁）
- ・「昔から「一書の人を恐れよ」と諺にもある通り」（田中菊雄『現代読書法』柁谷書店、1942年、57頁）

(2)

書を読み、書に読まれるな。

●出典

不明

●出典ノート

抜書の元となった文献は不明（多数の書誌のある文献）。

- 池田文庫所蔵資料  
調査中

- 池田研究ノート

- ・『若き日の読書』（1978年）＝『全集23』13、15、154、162頁
- ・『私の人間学』（1988年）＝『全集119』112、266頁
- ・『大いなる魂の詩』（1991年）＝『全集15』131、132頁
- ・『青春対話』（2006年）＝『全集64』168、169頁

- 備考

古来からある読書についてのいましめ・教訓と考えられるが出典は不明。一例として下記の文献を参照。

- ・「書を読まなければならん、書に読まれてはならぬ」（松村介石『修養四書』文栄閣、1911年、392頁）。なお、この一文は孟子の「悉く書を信ずれば則ち書無きに如かず」という文章への注釈として記されたもの。
- ・「書を読み、書に読まれるな、とは我々の絶えず聞かされる戒告であるが」（安倍能成『青年と教養』岩波書店、1940年、159頁）
- ・「書を読み、書に読まれるな、とは我々の絶えず聞かされる戒告であるが」（田中菊雄『現代読書法』柁谷書院、1942年、21頁）。なお、この一文は安倍前掲書から引用されたもの。

(3)

今日の文学は、書籍の悪集なり。

- 出典  
不明

- 出典ノート

抜書の元となった文献は不明（備考参照）

- 池田文庫所蔵資料  
調査中

- 池田研究ノート  
特記事項なし

●備考

当該抜書には、原稿作成の過程で誤植が生じた可能性が考えられる。一例として下記の文献を参照。

- ・「今日の真正なる大学は書籍の蒐集である。」(カーライル『英雄及英雄崇拜』(『世界大思想全集』第19巻所収) 柳田泉訳、春秋社、1930年、171頁)
- ・「今日の大学は書籍の蒐集なり」といつたカーライルの一言の意義は深い。」(田中菊雄『現代読書法』 柘谷書院、1942年、24頁)

池田文庫にはカーライル『英雄及英雄崇拜』(『カーライル全集』第5巻所収、柳田泉訳、春秋社、1923年；ラベル961031867)の所蔵が確認できる。

(4)

自己を作る事だ。それには、熱烈たる、勇気が必要だ。

●出典

不明

●出典ノート

抜書の元となった文献は不明

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

- ・『若き日の読書』(1978年) = 『全集23』13、15頁

●備考

なし

(5)

柔善、虚偽、軟情、すべてを排せよ。  
真の青年たる者よ、真実の人生を歩め。

●出典

不明

●出典ノート

抜書の元となった文献は不明

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

なし

(6)

社会は衆愚なり。衆愚を巧みに操つる者世の所謂英雄なり、則ち衆愚の所謂英雄なり、衆愚を教ふる者即ち予言者、詩人、文学者、宗教家、教師の任なり。名誉とは多くは衆愚の賄賂なり、俸給、報酬とは多くは衆愚の分捕なり。

（国木田独歩「欺かざるの記」より・原文のまま）

●出典

国木田独歩『欺かざるの記』

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

- ・国木田独歩『欺かざるの記 前編』隆文堂、1908年、149頁
- ・国木田独歩『欺かざるの記』春陽堂、1922年、110頁
- ・『明治大正文学全集』第22巻、春陽堂、1928年、539頁
- ・『国木田独歩全集』第5巻、改造社、1930年、119～120頁
- ・『国木田独歩全集』第5巻、鎌倉文庫、1948年、104頁
- ・『国木田独歩作品集』第3巻、創元社、1951年、55頁
- ・国木田独歩『欺かざるの記前編（上）』、市民文庫、1954年、99頁

●池田文庫所蔵資料

所蔵なし（備考参照）

●池田研究ノート

- ・『わたくしの随想集』（1970年）＝『全集19』138頁

●備考

池田文庫に所蔵されているのは、池田の青年期を過ぎた後の出版物である。所蔵資料については以下を参照。

- ・国木田独歩『国木田独歩全集』第6巻、学習研究社、1964年；ラベル 971116857
- ・国木田独歩『国木田独歩全集』第6巻、学習研究社、1964年；ラベル 971116865
- ・国木田独歩『国木田独歩全集』第6巻、学習研究社、1964年；ラベル 971157090
- ・国木田独歩『国木田独歩全集』第7巻、学習研究社、1965年；ラベル 961222506
- ・『現代日本思想大系』第13巻、筑摩書房、1965年；ラベル 961014351
- ・『現代日本思想大系』第13巻、筑摩書房、1965年；ラベル 971022020
- ・『現代日本思想大系』第13巻、筑摩書房、1965年；ラベル 971197059
- ・国木田独歩『欺かざるの記』上、潮文庫、1971年；ラベル 961085134
- ・国木田独歩『欺かざるの記』上、潮文庫、1971年；ラベル 961085142
- ・国木田独歩『欺かざるの記』上、潮文庫、1971年；ラベル 971134952
- ・国木田独歩『欺かざるの記』上、潮文庫、1971年；ラベル 961085151
- ・国木田独歩『欺かざるの記』下、潮文庫、1971年；ラベル 961085169
- ・国木田独歩『欺かざるの記』下、潮文庫、1971年；ラベル 971134961
- ・『世界教養全集』第37、平凡社、1974年；ラベル 971113971
- ・『定本国木田独歩全集』第6巻、増訂版前篇、国木田独歩全集編纂委員会編、学習研究社、1978年；ラベル 971247188
- ・『定本国木田独歩全集』第7巻、増訂版後篇、国木田独歩全集編纂委員会編、学習研究社、1978年；ラベル 971247196

(7)

衆愚を相手にせず、衆愚に左右されず、唯々強く正しく、昔古の偉人、英雄を師として、友人として、意義ある少壮時代を送れよかし。

●出典

不明

●出典ノート

抜書の元となった文献は不明

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

前出の独歩『欺かざるの記』に関連した文章と考えられるが、同書で該当の文章は確認できない。池田の所感である可能性も考えられる。

(8)

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰か云ふ、狭くして且陋なりと。家陋なりと雖ども、膝を容る可く、庭狭きも碧空仰ぐ可く、歩して永遠を思ふに足る。  
神の月日は此処にも照れば、四季も来り見舞ひ、風、雨、雪、霰かはる／＼到りて興浅からず。蝶兒来りて舞ひ、蟬来りて鳴き、小鳥来り遊び、秋蛩また吟ず。静かに観ずれば、宇宙の富は殆んど三坪の庭に溢るゝを覚ゆるなり。

（徳富蘆花「自然と人生」より・原文のまま）

●出典

徳富蘆花『自然と人生』

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

- ・徳富健次郎『自然と人生』民友社、1900年、182～183頁
- ・徳富健次郎『自然と人生』民友社、1923年改版、182～183頁
- ・『現代日本文学全集』第12篇、改造社、1927年、470頁
- ・『蘆花全集』第3巻、蘆花全集刊行会、1929年、97頁
- ・『蘆花全集』第3巻、新潮社、1929年、97頁
- ・『明治大正文学全集』第13巻、春陽堂、1930年、186頁
- ・徳富蘆花『自然と人生』岩波文庫、1933年、126頁

●池田文庫所蔵資料

所蔵なし（備考参照）

●池田研究ノート

- ・『私の履歴書』（1975年）＝『全集22』235頁

●備考

池田文庫に所蔵されているのは、池田の青年期を過ぎた後の出版物である。所蔵資料について

ては以下を参照。

- ・徳富蘆花『自然と人生』改版、岩波文庫、1958年；ラベル 961058854
- ・徳富蘆花『自然と人生』改版、岩波文庫、1958年；ラベル 971254222
- ・徳富健次郎『自然と人生』（名著複刻全集近代文学館；精選〔3〕）、日本近代文学館、1968年；ラベル 001012606
- ・徳富蘆花『自然と人生』潮文庫、1971年；ラベル 961085088
- ・徳富蘆花『自然と人生』潮文庫、1971年；ラベル 971134995
- ・徳富蘆花『自然と人生』潮文庫、1971年；ラベル 971135002

(9)

恐れを知って、しかも之を恐れざる者こそ、真の勇者である。

●出典

ウェリントンの言葉

●出典ノート

抜書の元となった文献は不明（多数の書誌のある文献）

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

初代ウェリントン公爵アーサー・ウェルズリーの言葉と推定。他の抜書の事例として下記の文献を参照。

- ・「恐れを知つて、しかも之を恐れざる者こそ真の勇者である。——ウェリントン——」（加藤咄堂編『人生日記 一日一訓』田中誠光堂、1936年、711頁）

(10)

青年は唯素っ裸でいいのだ。これが、青年らしい、純情を持ち、青年らしい感激を持ち、青年らしい健康と、率直さと、若さと、輝かしさと希望に、燃えているというだけで、宰相よりも将軍よりも、恵まれているのである。

●出典

不明

●出典ノート

調査中

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

池田大作『私はこう思う』（毎日新聞社、1969年、110頁）の中でドイツの詩人シラーのものとして同じ言葉が紹介されている。ただし、現時点ではシラーの言葉として該当するものは確認できていない。なお、シラーの言葉として紹介している他の文献として、以下を参照。

「ドイツの詩人、シラー「青年は、ただ素っ裸でいいのだ。青年らしい純情をもち、青年らしい感激をもち、青年らしい健康と、率直さと、若さと輝かしさと、希望に燃えているというだけで、宰相よりも、将軍よりも恵まれているのである。」（上条あきら「ポストカード」『歌劇』654号、宝塚クリエイティブアーツ、1980年、109頁）

(11)

一人立てる時に、強きものは真正の勇者なり。 (シルレル)

●出典

シラーの言葉

●出典ノート

抜粋の元となった文献は不明（多数の書誌のある文献）

●池田文庫所蔵資料

調査中（備考参照）

●池田研究ノート

- ・『人間革命第1巻』（1965年）＝『全集144』169頁
- ・『創立者とともに〈2〉』（1991年）＝『全集57』131頁
- ・『青春対話』（2006年）＝『全集64』390頁
- ・「学生部夏季講習会での池田名誉会長のスピーチ」（『聖教新聞』1990年7月23日）＝『全集74』520頁

●備考

- ・その後の調査により『完本 若き日の読書』（初版第1刷）に記載の情報を改めた。
- ・池田大作『私はこう思う』（毎日新聞社、1969年、177頁）の中でドイツの詩人シラーのものとして同じ言葉が紹介されている。
- ・当該格言は、歴史上、多くの人々が様々な機会に紹介してきた有名な一節。読点以外の表現が一致するものとして、以下の文献を参照。
  - ・森脇紫逕編『精神修養一語千金』修文館、1913年、251頁
  - ・安部清見『尋常小学修身学習指導案 尋4』明治図書、1927年、234頁
  - ・滋賀県女子師範学校附属小学校編『訓育主体学校経営の実践』政経書院、1936年、215頁

また、表現は完全に一致しないが同趣旨のものとして下記の文献を参照。

- ・「詩人シルレルは申しました、独り立つ時に強き者は眞正の勇者なり」（内村鑑三『基督教講演集』第1集、警醒社、1903年、46頁）
- ・「一人立てる時に強き者は眞正の勇者なり。シルレル」（内ヶ崎作三郎編『人生日訓』大日本図書、1915年、335頁）
- ・「一人立てるとき強きものは、眞の勇者なり」（森徳治『労務者の職分』第一公論社、1944年、66頁）

なお、比較的新しい訳書での表現として下記の文献を参照。

- ・「強い者はひとりである時が一番強いのです」（シラー『ヴィルヘルム・テル』桜井政隆訳、岩波文庫、1948年、38頁）

池田文庫に所蔵されているのは、池田の青年期を過ぎた後の出版物である。所蔵資料については以下を参照。

- ・『世界文学全集』第9巻、河出書房新社、1961年；ラベル 991022025
- ・シラー『ヴィルヘルム・テル』桜井政隆・桜井国隆訳、改版、岩波文庫、1957年；ラベル 961049961

- ・シラー『ヴィルヘルム・テル』桜井政隆・桜井国隆訳、改版、岩波文庫、1957年；ラベル 001000781

(12)

閑散の人は溜水の如し、遂に腐敗すべし。

●出典

西洋の格言

●出典ノート

抜粋の元となった文献は不明（多数の書誌のある文献）

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

- ・その後の調査により『完本 若き日の読書』（初版第1刷）に記載の情報を改めた。
- ・西洋の諺あるいはフランスの諺として紹介されることが多い言葉。一例として下記の文献を参照。
  - ・「閑散の人は溜水の如く遂に腐敗すへし（仏国俚諺）」（『大日本百科全集』第25巻、誠文堂、1928年、137頁）
  - ・「閑散の人は溜水の如し遂に腐敗すべし（西諺）」（同上、482頁）

(13)

世に処するに、どんな難事に出会っても、臆してはならぬ。「ああ、何でも来い。俺の体が、ねぢれるならねぢって見よ」といふ料簡で行ふがよい。さうすれば難事が到来すればする程面白味がついて来るものだ。

何でも大胆にかからなくてはならぬ。もし、一度で出来なければ、何度でも出来る迄やり通すことが、肝要である。  
(勝海舟)

●出典

吉本襄編『海舟先生氷川清話』か

●出典ノート

抜粋の元となった文献は不明（多数の書誌のある文献）

●池田文庫所蔵資料

所蔵については備考を参照

●池田研究ノート

・『若き日の読書』（1978年）＝『全集23』56～57頁

・「随筆「新・人間革命」209 庶民の王国・墨田」（『聖教新聞』2001年4月26日）＝『全集132』40頁

●備考

現在『氷川清話』は大きく分けて、勝海舟の談話および掲載記事を吉本襄がまとめた吉本版（合冊版1902年）と、吉本版を掲載元記事と厳密に校訂した江藤淳・松浦玲編の講談社版（1973年）がある。当該抜書は、吉本版・講談社版ともに一致する言葉がない。吉本前掲書の文章を元に微妙に書き換えた格言集の類いや教科書用に編集されたものに依拠したか、池田自身が要約的にまとめなおした可能性がある。

なお、吉本版の原文の該当箇所は以下の通り。

「それから又、世に處するには、何んな難事に出會つても臆病ではいけない。さあ何程でも來い。己れの身體が、ねぢれるならば、ねぢつて見ろ、と云ふ了簡で、事を捌いて行く時は、難事が到來すればする程面白味が附いて來て、物事は雑作もなく着落して了ふものだ。何んでも大膽に、無用意に、打ちかゝらなければいけない。どうせうか、かうせうか、と思案してかゝる日には、もういけない。六ヶしからうが、易からうが、そんな事は考へずに、所謂無我といふ眞境に入つて無用意で打ちかゝつて行くのだもし、成功しなければ、成功する所まで働き續けて、決して間斷があつてはいけない、世の中の人、大抵事業の成功するまでに、はや根氣が盡きて疲れて了ふから大事が出来ないのだ。」（吉本襄編『海舟先生氷川清話』大文館書店、1933年、223～224頁）

池田文庫所蔵の『氷川清話』については以下を参照。

- ・吉本襄編『海舟先生氷川清話』河野成光館、1909年；ラベル991011163
- ・吉本襄編『氷川清話：海舟先生』前田大文館、1929年；ラベル991010809
- ・勝部真長編『勝海舟自伝：氷川清話』広池学園出版部、1967年；ラベル971031495
- ・勝部真長編『勝海舟自伝：氷川清話』広池学園出版部、1967年；ラベル971112363
- ・勝部真長編『氷川清話：付勝海舟伝』角川文庫、1972年；ラベル971148309

(14)

Every son of Adam can become a sincere-man; an original-man. Son of Nature,  
original-man. (カーライル)

●出典

国木田独歩『欺かざるの記』に記載のカーライルの言葉

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

- ・国木田独歩『欺かざるの記 前編』隆文堂、1908年、102頁
- ・国木田独歩『欺かざるの記』春陽堂、1922年、74頁
- ・『明治大正文学全集』第22巻、春陽堂、1928年、522頁
- ・『国木田独歩全集』第5巻、改造社、1930年、82頁
- ・『国木田独歩全集』第5巻、鎌倉文庫、1948年、71頁
- ・『国木田独歩作品集』第3巻、創元社、1951年、38頁
- ・国木田独歩『欺かざるの記前編（上）』、市民文庫、1954年、69頁

●池田文庫所蔵資料

抜書番号6の備考を参照

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

- ・その後の調査により『完本 若き日の読書』（初版第1刷）に記載の情報を改めた。
- ・当該抜書は、以下の独歩『欺かざるの記』の一節と一致する。「其の一に曰く、Every son of Adam can become a *sincere-man; an original-man* Son of Nature. *original-man*. カーライル」（『国木田独歩全集』第5巻、改造社、1930年、82頁）。
- ・当該抜書は、カーライル『英雄と英雄崇拜』の一節を元としているが、英語の原文と合致しない。邦訳として、カーライル『英雄及英雄崇拜』（『世界大思想全集』第19巻所収、柳田泉訳、春秋社、1930年）で該当箇所を確認すると「此の意味に於いて、如何なるアダムの子も眞誠なる人、独創の人となり得る、何人にまれ不眞誠なる人となるべき宿命を持つては居らぬ。」（133頁）とある。英語の原文は“Every son of Adam can become a sincere man, an original man, in this sense; no mortal is doomed to be an insincere man.”（Thomas Carlyle, *On Heroes, Hero-worship and the Heroic in History*. (London: James

Fraser,1841) ,p.203.) である。

(15)

初春の花見る毎に父母の、  
傾く年を独り寝に泣く。

(国木田独歩)

●出典

国木田独歩『欺かざるの記』

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

- ・国木田独歩『欺かざるの記 前編』隆文堂、1908年、85頁
- ・国木田独歩『欺かざるの記』春陽堂、1922年、62頁
- ・『明治大正文学全集』第22巻、春陽堂、1928年、516頁
- ・『国木田独歩全集』第5巻、改造社、1930年、69頁
- ・『国木田独歩全集』第5巻、鎌倉文庫、1948年、60頁
- ・『国木田独歩作品集』第3巻、創元社、1951年、32頁
- ・国木田独歩『欺かざるの記前編（上）』、市民文庫、1954年、59頁

●池田文庫所蔵資料

抜書番号6の備考を参照

●池田研究ノート

- ・『私の履歴書』（1975年）＝『全集22』236頁

●備考

なし

(16)

爾、今日の使命を果すべし。

●出典

不明

●出典ノート

抜書の元となった文献は不明

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

・『若き日の日記』（1967年）＝『全集 36』15頁

●備考

・池田大作『若き日の日記』（1967年）＝『全集 36』15頁の1949年5月31日条には次のような文がある。当該抜書とは合致しない。

「今日の使命を果すべし」。

・「読書ノート（三）」で引用される後藤静香『権威』（希望社出版部、1926年）に所収の「使命」をうけた池田自身の所感の可能性もある。後藤『権威』には、「今日の使命を／完全に果たし得る者のみが／更に高き明日の使命を聞く。」（158頁、引用文中の／は本稿編者による改行）とある。また、同書には「汝の使命を果たせ」（242頁）の記述もある。

(17)

智深き人は  
武器に頼ることをしない。

●出典

トルストイ『人生読本』八住利雄訳に記載の老子の言葉

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

- ・トルストイ『人生読本 上巻』八住利雄訳、春秋社、1928年、87頁
- ・トルストイ『人生読本（一）』八住利雄訳、春秋文庫、1933年、87頁
- ・トルストイ『人生読本 1』八住利雄訳、清教社、1949年、87頁

●池田文庫所蔵資料

・トルストイ『人生読本』八住利雄訳、上巻、春秋社、1928年；ラベル 991000889

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

- ・その後の調査により『完本 若き日の読書』（初版第1刷）に記載の情報を改めた。
- ・当該出典の該当箇所には下記の通り「老子」とあるが、もとの出典は不明。

「最も立派な武器は、最も大きな悪をなす。／智深き人は武器に頼ることをしない。彼は平和を尊ぶ。彼は勝つても、喜ぶことをしない。／戦勝を喜ぶことは、殺人を喜ぶことを意味する。殺人を喜ぶやうな者は、人生の目的に達することは出来ない。——(老子)」  
(トルストイ『人生読本 (一)』八住利雄訳、春秋文庫、1933年、87頁、引用文中の／は本稿编者による改行)

(18)

石川啄木 こころよく我にはたらく 仕事あれ それを仕遂げて死なむと思ふ <span style="float: right;">(一握の砂)</span>
-------------------------------------------------------------------------------------------

●出典

石川啄木『一握の砂』

●出典ノート

- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1946年、14頁

●池田文庫所蔵資料

- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1946年；ラベル 001035835

●池田研究ノート

- ・『青春対話』（2006年）＝『全集64』93頁
- ・『希望対話』（2003年）＝『全集65』153頁

●備考

池田文庫所蔵資料で、抜書番号18、19、20の出典の可能性があるのは、岩波文庫版『啄木歌集』（1946年）のみである。同書には『一握の砂』が収録されている。書き込みはあるが池田本人のものであるかは不明。池田が手に取った可能性のある文献として当時出版されていた文庫版は以下の通りである。

- ・石川啄木『短歌集』改造文庫、1931年、12頁
- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1946年、14頁
- ・石川啄木『悲しき玩具』鎌倉文庫、1946年、9頁
- ・石川啄木『石川啄木集』上巻、新潮文庫、1950年、29頁

池田文庫所蔵資料のうち上記以外は、池田の青年期を過ぎた後の出版物である。所蔵資料については以下を参照。

- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1957年改版；ラベル 961055197
- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1957年改版；ラベル 961055201
- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1957年改版；ラベル 971254214
- ・『定本石川啄木全歌集』河出書房、1964年；ラベル 961196602
- ・『石川啄木詩歌集』弥生書房、1965年；ラベル 971089370
- ・『日本文学全集』第1集第29巻、河出書房新社、1966年；ラベル 971245908
- ・『日本の文学』第15巻、中央公論社、1967年；ラベル 971167079
- ・『日本文学全集』第12巻、集英社、1967年；ラベル 971114412
- ・石川啄木『一握の砂』日本近代文学館、1968年；ラベル 001012908
- ・石川啄木『石川啄木歌集』潮文庫、1970年；ラベル 961081953
- ・石川啄木『石川啄木歌集』潮文庫、1970年；ラベル 971134766
- ・石川啄木『石川啄木歌集』潮文庫、1970年；ラベル 971251681
- ・『日本文学全集』第12巻、集英社、1972年；ラベル 971108251

(19)

寝つつ読む本の重さに  
つかれたる  
手を休めては、物を思へり。

(悲しき玩具)

●出典

石川啄木『悲しき玩具』

●出典ノート

- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1946年、191頁

●池田文庫所蔵資料

- ・石川啄木『悲しき玩具：一握の砂以後』稿本・肉筆版、書物展望社、1936年；ラベル 001012355
- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1946年；ラベル 001035835

●池田研究ノート

『若き日の読書』（1978年）＝『全集23』44頁

●備考

池田文庫所蔵資料で、抜書番号18、19、20の出典の可能性があるのは、岩波文庫版『啄木歌集』（1946年）のみである。同書には『悲しき玩具』が収録されている。書き込みはあるが池田本人のものであるかは不明。池田が手に取った可能性のある文献として当時出版されていた文庫版は以下の通りである。

- ・石川啄木『短歌集』改造文庫、1931年、178頁
- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1946年、191頁
- ・石川啄木『悲しき玩具』鎌倉文庫、1946年、233頁
- ・石川啄木『啄木歌抄』青磁社文庫、1948年、141頁

池田文庫所蔵資料のうち上記以外は、池田の青年期を過ぎた後の出版物である。所蔵資料については以下を参照。

- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1957年改版；ラベル961055197
- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1957年改版；ラベル961055201
- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1957年改版；ラベル971254214
- ・『定本石川啄木全歌集』河出書房、1964年；ラベル961196602
- ・『石川啄木詩歌集』弥生書房、1965年；ラベル971089370
- ・『日本の文学』第15巻、中央公論社、1967年；ラベル971167079
- ・『日本文学全集』第12巻、集英社、1967年；ラベル971114412
- ・石川啄木『悲しき玩具：一握の砂以後』日本近代文学館、1969年；ラベル001012355
- ・石川啄木『石川啄木歌集』潮文庫、1970年；ラベル961081953
- ・石川啄木『石川啄木歌集』潮文庫、1970年；ラベル971134766
- ・石川啄木『石川啄木歌集』潮文庫、1970年；ラベル971251681
- ・『日本文学全集』第12巻、集英社、1972年；ラベル971108251

(20)

それもよし これもよしとてある人の  
その気がるさを  
欲しくなりたり

(一握の砂)

●出典

石川啄木『一握の砂』

●出典ノート

- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1946年、24頁

●池田文庫所蔵資料

- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1946年；ラベル 001035835

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

池田文庫所蔵資料で、抜書番号 18、19、20 の出典の可能性があるのは、岩波文庫版『啄木歌集』（1946年）のみである。同書には『一握の砂』が収録されている。書き込みはあるが池田本人のものであるかは不明。池田が手に取った可能性のある文献として当時出版されていた文庫版は以下の通りである。

- ・石川啄木『短歌集』改造文庫、1931年、21頁
- ・石川啄木『啄木歌集』岩波文庫、1946年、24頁
- ・石川啄木『悲しき玩具』鎌倉文庫、1946年、22頁
- ・石川啄木『石川啄木集』上巻、新潮文庫、1950年、38頁

池田文庫所蔵資料のうち上記以外は、池田の青年期を過ぎた後の出版物である。所蔵資料については抜書番号 18 の備考を参照。

(21)

生存競争は、同種の個体間及変種間に最も激烈なり。  
(ダーウィン「種の起源」より)

●出典

ダーウィン『種の起源』か

●出典ノート

抜書の元となった文献は不明（多数の書誌のある文献）

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

- ・その後の調査により『完本 若き日の読書』（初版第1刷）に記載の情報を改めた。
- ・「読書ノート」中のダーウィン『種の起源』の抜書2件（抜書番号21および抜書番号22）に関して、同一文献からのものと仮定すると、この出典は以下の3つの可能性が考えられる。

①丘浅次郎訳『種之起源』（東京開成館、1905年）

「生存競争は同種の個体間及び變種間に最も激烈なること」（121頁、見出し）

「然れども吾人は既に自然淘汰が如何に絶滅を規定するものなるかを観察したり、而して世界史上、絶滅が如何に盛に作用したるかは地質學の明示する所なり。自然淘汰は亦特質の分岐を生ぜしむ」（211～212頁）

当該出典の1つめの文は、当該抜書とほぼ合致する。2つめの文は、「特質の分岐」という言葉が当該抜書の「形質分岐」と微妙に異なっている。池田が当該出典に依拠していたとすれば、原稿作成の過程で誤記が生じた可能性が考えられる。

②内山賢次・石田周三訳『ダーウィン全集』第2巻（白揚社、1939年）

「生存競争は同じ種の個体の間と変種の間で最も烈しい」（125頁、見出し）

「しかし我々は既に自然淘汰がいかにして絶滅を惹起させたかを見だし、またいかに廣くその絶滅が世界の歴史のうちに行はれたかは地質學が明らかにそれを示してゐる。また自然淘汰は、形質の分岐に導く。」（202頁）

当該出典の1つめの文は、当該抜書とやや異なる。2つめの文は、当該抜書の「形質分岐」という言葉についてほぼ同じものを確認できる。当該出典の文を要約したものと解釈することは可能である。

③田中菊雄『現代読書法』（柊谷書院、1942年）

「生存競争は同種の個体間及び變種間に最も激烈なり」（83頁）

「自然淘汰は絶滅と特質分岐を導く」（同頁）

田中が自身の所持していたダーウィン『種の起源』の原書に関連して紹介している言葉である。当該出典の1つめの文は、当該抜書の文とほぼ同一である。2つめの文は、「形質」が「特質」となっていること以外は、ほぼ同じ表現である。この言葉の詳細（田中自身による訳か等）は不明。

なお、これら以外の教科書や格言集の類いから抜き書きした可能性もある。

(22)

自然淘汰は、絶滅と、形質分岐を導く。 （ダーウィン「種の起源」より）

●出典

ダーウィン『種の起源』か

●出典ノート

抜書の元となった文献は不明（多数の書誌ある文献）

●池田文庫所蔵資料

調査中

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

- ・その後の調査により『完本 若き日の読書』（初版第1刷）に記載の情報を改めた。
- ・抜書番号21の備考を参照

(23)

「神は自然さのうちにある。決して不自然の中にはあらはれない。無心にして宇宙の法則にしたがひ、自然に行動してゐる時、僕らは決して罪を感じるものぢやない。僕らの心は安らかだ。それは無意識に神の法則の中を歩いてゐるからだ。が、理窟はどんなに尤もらしくついても自然の法にそむいた事をしてゐる時、どこかで無理をしてゐる時、僕らの心は決してそのやうにゆつたりと安らかである事は出来ない。それはどこかで神の法則を踏みはずしてゐるからだ。

真に自然であるとは神と共にある事だ。僕らの心が肉体と同じやうに、病的にならず健全な安泰にゐる時、僕らは善を思はず、悪を思はずして唯悠々たる自然さのうちに直ちに神を見る事が出来る。——」

（長与善郎「竹沢先生と云ふ人」より・原文のまま）

●出典

長与善郎『竹沢先生と云ふ人』

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

- ・長与善郎『竹沢先生と云ふ人』岩波書店、1925年、467～468頁
- ・『現代日本文学全集』第44篇、改造社、1930年、428頁

- ・長与善郎『竹沢先生と云ふ人』東京出版、1946年、186頁
- ・長与善郎『竹沢先生と云ふ人 後篇』新潮文庫、1948年、216頁
- ・長与善郎『竹沢先生と云ふ人』小山文庫、1949年、386～387頁
- ・長与善郎『竹沢先生と云ふ人』岩波文庫、1950年、383～384頁
- ・『現代日本小説大系』第28巻、河出書房、1951年、193頁
- ・長与善郎『竹沢先生と云ふ人 後篇』角川文庫、1954年、175～176頁

●池田文庫所蔵資料

- ・長与善郎『竹沢先生と云ふ人』新潮文庫、1948年；ラベル 001014072

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

池田文庫所蔵資料のうち上記以外は、池田の青年期を過ぎた後の出版物である。所蔵資料については以下を参照。

- ・長与善郎『竹沢先生と云う人』岩波文庫、1960年；ラベル 961017864
- ・長与善郎『竹沢先生と云う人』岩波文庫、1960年；ラベル 971251991
- ・長与善郎『竹沢先生という人』潮文庫、1970年；ラベル 961081988
- ・長与善郎『竹沢先生という人』潮文庫、1970年；ラベル 971134791
- ・長与善郎『竹沢先生という人』潮文庫、1970年；ラベル 971259500

(24)

彼は私に向って猛烈な感情を投げつけた。  
「年なんか取るもんじゃねえ、若い、若い内に死ぬることだ。でないと、こんなざまあになるんだ。嘘は云はねえ、俺は八十七だ。随分国のためにつくしたもんだ。善行線が三本、ヴィクトリア十字章よ、それでゐて、おしまいには斯ういふ始末だ。死にてえ、死にてえ。一日も早く死にてえものだ。」  
(ジャック・ロンドン「奈落の人々」より)

●出典

ジャック・ロンドン『奈落の人々』和気津次郎訳

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

- ・ジャック・ロンドン『奈落の人々』和気津次郎訳、叢文閣、1920年、65頁
- ・ジャック・ロンドン『奈落の人々』和気津次郎訳、改造文庫、1929年、61頁

●池田文庫所蔵資料

・ジャック・ロンドン『奈落の人々』和気津次郎訳、改造文庫、1929年；ラベル 971150311

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

当該抜書は原文との間に表現上の違いがある。原文の該当箇所は次の通りである。

「彼は私に向つて猛烈な感情を投げ付けた。「年なんか取るもんぢやねえぜ若いの、若い内に死ぬるこつた。でないと、こんなざまになるんだ。嘘は云はねえ。俺は八十七だ、随分國の爲にはつくしたものだ。善行線が三本にヴェイクトリア十字章よ、それでめて、おしまひには斯ういふ始末だ。死にてえ、死にてえ。一日も早く死にてえものだ。」」（ジャック・ロンドン『奈落の人々』和気津次郎訳、改造文庫、1929年、61頁）

(25)

キリスト教の伝道は、その心臓（感情）に訴えたものであった。その心意（知識）に訴えたものではなかった。（バカーニン「神と国家」より）

●出典

バカーニン『神と国家』

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

・バカーニン『神と国家』本荘可宗訳、改造文庫、1929年、111頁

・バカーニン『神と国家』（『社会思想全集』第28巻所収）八太舟三訳、平凡社、1930年、88頁

・バカーニン『神と国家』（『世界大思想全集』第40巻所収）麻生義訳、春秋社、1931年、73頁

●池田文庫所蔵資料

・バカーニン『神と国家』本荘可宗訳、改造文庫、1929年；ラベル 955019648

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

- ・その後の調査により『完本 若き日の読書』（初版第1刷）に記載の情報を改めた。
- ・当該抜書は原文との間に表現上の違いがある。原文の該当箇所は次の通りである。  
「基督教の傳道はその心臓（感情）に訴へたのであつた。その心意（知識）に訴へたのではなかつた。」（バクーニン『神と国家』本荘可宗訳、改造文庫、1929年、111頁）

(26)

世界を通じて国土と結び付いた国家を有せざる大民族は猶太民族だ。又実際に国家と結び付いた国土を有せざる大民族は支那人だ。近代的の意味に於ける国家が自分自らの破綻によって形を変えなければならなくなった時、地球の表面に新しい姿を与へるものは、実にこの二大民族ではあるまいか。彼等は私達の知らない自由を持ち、且つそれを知っている。その自由はなほ若い。その胎は豊饒だ。  
(有島武郎「旅する心」より)

●出典

有島武郎『旅する心』

●出典ノート

- ・有島武郎『旅する心』改造文庫、1933年、74頁

●池田文庫所蔵資料

- ・有島武郎『旅する心』改造文庫、1933年；ラベル 9771150800

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

池田文庫所蔵資料には次の3箇所<sup>①</sup>に線引きがある。①「猶太人。世界の歴史に猶太人のあるのは」(72頁)の冒頭、②「世界を通じて国土と結び付いた国家を有せざる大民族は」(74頁)の冒頭、③「美術がその発達の高潮に赴く時には、民衆の倫理的傾向も」(100頁)の冒頭。

②は抜書番号26、③は抜書番号27の箇所と一致する。よって池田文庫所蔵資料の線引きは池田本人のものである可能性が高い。

池田文庫所蔵資料のうち上記以外は、池田の青年期を過ぎた後の出版物である。所蔵資料については以下を参照。

- ・『有島武郎全集』第6巻、筑摩書房、1981年；ラベル 971101761

(27)

私はラスキンの「美術講話」を繙いた。「美術がその發達の高潮に赴く時には、民衆の倫理的傾向も美術と同方向に向上し高進してゐる時で、この併行的傾向が極度に達し、互ひの間にやや軒<sup>けん</sup>軽<sup>ちやう</sup>するところが出来て、各々が互ひから自分を弁護し始めるが最後、美術の衰運が始まる」（有島武郎「旅する心」より）

●出典

有島武郎『旅する心』

●出典ノート

・有島武郎『旅する心』改造文庫、1933年、100頁

●池田文庫所蔵資料

・有島武郎『旅する心』改造文庫、1933年；ラベル 9771150800

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

・抜書番号 26 の備考を参照

・当該抜書は原文との間に表現上の違いがある。原文の該当箇所は次の通りである。

「私はラスキンの「美術講話」を繙いた。「美術がその發達の高潮に赴く時には、民衆の倫理的傾向も美術と同方向に向上し高進してゐる時で、この併行的傾向が極度に達し、互ひの間にやゝ軒<sup>けん</sup>軽<sup>ちやう</sup>するところが出来て、各々が互ひから各々自分を辯護し始めるが最後、美術の衰運が始まる」（有島武郎『旅する心』改造文庫、1933年、100頁）

(28)

三つの別々の思想の流派が、合一して日本更生の起因となった。第一の思想は探究することを教へ、第二は行動することを教へ、第三は行動の目的を教へてくれた。（岡倉覚三「日本の目覚め」より）

●出典

岡倉覚三著『日本の目覚め』村岡博訳

●出典ノート

岡倉覚三『日本の目覚め』村岡博訳、岩波文庫、1940年、42頁

●池田文庫所蔵資料

・岡倉覚三『日本の目覚め』村岡博訳、岩波文庫、1940年；ラベル971139610

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

池田文庫所蔵資料には池田自身の書き込みが確認できる。

(29)

陽明学説の革命的性質のため、徳川政府はすべてのことが憂慮の因であった。というのはこの学徒は彼等の正義の観念の関するところ何物にも逡巡することはなかったから。  
(岡倉覚三「日本の目覚め」より)

●出典

岡倉覚三著『日本の目覚め』村岡博訳

●出典ノート

岡倉覚三『日本の目覚め』村岡博訳、岩波文庫、1940年、47頁

●池田文庫所蔵資料

・岡倉覚三『日本の目覚め』村岡博訳、岩波文庫、1940年；ラベル971139610

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

池田文庫所蔵資料には池田自身の書き込みが確認できる。

(30)

大塩中斎の言をひく。「電光の如く打ち、雷の如く怖くあれ、然し空自身は常に高く澄み渡っていることを忘るゝ勿れ」と。  
(岡倉覚三「日本の目覚め」より)

●出典

岡倉覚三著『日本の目覚め』村岡博訳

●出典ノート

岡倉覚三『日本の目覚め』村岡博訳、岩波文庫、1940年、47頁

●池田文庫所蔵資料

・岡倉覚三『日本の目覚め』村岡博訳、岩波文庫、1940年；ラベル 971139610

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

・当該抜書中の「大塩中斉の言を引く。」は、池田自身が入れた文章と推定。当該出典の該当箇所として下記を参照。

「彼〔大鹽〕の平素の心構は、興味深い哲學的の著作に於て「電光の如く打ち、雷の如く怖くあれ、然し空自身は常に高く澄み渡つてゐることを忘るゝ勿れ。」（岡倉覚三『日本の目覚め』村岡博訳、岩波文庫、1940年、47頁。〔 〕内は本稿編者の補足、直前に大塩の話が出ている）

・池田文庫所蔵資料には池田自身の書き込みが確認できる。

(31)

三木清「人生論ノート」より  
感傷には常に何等かの虚栄がある。

(感傷について)

●出典

三木清『人生論ノート』

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

- ・三木清『人生論ノート』創元選書、1941年、176頁
- ・三木清『人生論ノート』創元文庫、1951年、106頁
- ・『三木清著作集』第16巻、岩波書店、1951年、124頁
- ・三木清『人生論ノート』新潮文庫、1954年、110頁

●池田文庫所蔵資料

- ・『三木清著作集』第16巻、岩波書店、1951年；ラベル 961018119
- ・三木清『人生論ノート』新潮文庫、1954年；ラベル 971130876

・三木清『人生論ノート』新潮文庫、1954年；ラベル 001014064

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

池田文庫所蔵資料のうち上記以外は、池田の青年期を過ぎた後の出版物である。所蔵資料については以下を参照。

・『三木清全集』第1巻、岩波書店、1966年；ラベル 961018143

・『三木清全集』第1巻、岩波書店、1966年；ラベル 961018151

(32)

歴史は不確定なものから出て来る。噂というものはその最も不確定なものである。  
而し歴史は最も確定的なものではないのか。 (噂について)

●出典

三木清『人生論ノート』

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

・三木清『人生論ノート』創元選書、1941年、137頁

・三木清『人生論ノート』創元文庫、1951年、83頁

・『三木清著作集』第16巻、岩波書店、1951年、96頁

・三木清『人生論ノート』新潮文庫、1954年、87頁

●池田文庫所蔵資料

・『三木清著作集』第16巻、岩波書店、1951年；ラベル 961018119

・三木清『人生論ノート』新潮文庫、1954年；ラベル 971130876

・三木清『人生論ノート』新潮文庫、1954年；ラベル 001014064

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

・抜書番号31の備考を参照

- ・当該抜書は原文との間に表現上の違いがある。原文の該当箇所は次の通りである。  
「歴史は不確定なものから出て来る。噂といふものはその最も不確定なものである。しかも歴史は最も確定的なものではないのか。」（三木清『人生論ノート』創元選書、1941年、137頁）。
- ・当該抜書の「而し」は、出典では、管見の限りすべての版で「しかも」となっている。当該抜書には、原稿作成の過程で誤植が生じた可能性が考えられる。

(33)

噂するやうに批評する批評家は多い。けれども批評を歴史的確率の問題として取り上げる批評家は稀である。  
(噂について)

●出典

三木清『人生論ノート』

●出典ノート

池田の青年期までに出版された当該文献と該当箇所は下記の通り。

- ・三木清『人生論ノート』創元選書、1941年、138頁
- ・三木清『人生論ノート』創元文庫、1951年、83頁
- ・『三木清著作集』第16巻、岩波書店、1951年、97頁
- ・三木清『人生論ノート』新潮文庫、1954年、87頁

●池田文庫所蔵資料

- ・『三木清著作集』第16巻、岩波書店、1951年；ラベル 961018119
- ・三木清『人生論ノート』新潮文庫、1954年；ラベル 971130876
- ・三木清『人生論ノート』新潮文庫、1954年；ラベル 001014064

●池田研究ノート

特記事項なし

●備考

抜書番号 31 の備考参照